

京都市廃棄物減量等推進審議会 第5回次期クリーンセンター整備等検討部会
摘録

【日 時】令和8年3月4日（水）午後6時00分～午後7時45分

【場 所】京都市役所 本庁舎1階 環境政策局会議室（環境総務課執務室内）

【出席委員】笹尾委員（web）、島田委員、高岡部会長、水谷委員、矢野委員

議題：京・資源めぐるプラン2025改訂版（案）について

（事務局）

以下の資料に基づき説明。

資料1 京・資源めぐるプラン2025改訂版（案）

参考資料1-1 市民意見募集冊子

参考資料1-2 プラン改定骨子案

参考資料1-3 「ごみ減量及び資源循環施策のあり方について」に関する市民意見募集結果と本市の考え方（案）について

（矢野委員）

資料1-3の回答者数83名について。下に参考で全体の254名とあるのは、今回は複数の計画のパブコメをしていて、その総数であり、その中で本部会に関係する「京・資源めぐるプラン」の回答が83名という理解でよいか。年齢構成を見ると、20代など若い世代からも一定の回答があるのは嬉しく拝見した。パブコメの反応としては、多いのか少ないのかどの様に捉えているのか。

（事務局）

お見込みのとおりで、4計画全体の回答者数が254名で、そのうち「京・資源めぐるプラン」についての回答が83名ということである。前回、令和2年度に実施した「京都市循環型社会推進基本計画（2021-2030）（案）」の回答者数が333名で、意見数は573件であった。前回と今回のパブリックコメントで、計画の策定と中間見直しという違いがある中、回答者数は少なくなっているものの20歳代の回答の割合が大きくなっている。前回のパブリックコメントと比べると、前は20歳代が9%であったが、今回は23%。前は30代、40代、50代、60代が各々21、29、18、15%であり、今回20歳代が前回より増加したという傾向がある。また、今回パブリックコメントを実施した4計画の中では、地球温暖化対策計画の136名に次いで多い回答者数となっている。

（矢野委員）

簡易破砕機の件で、小型の可搬式とのことだが、規模のイメージをお聞きしたい。また、この小型可搬式の破砕機はリースと捉えてよいか、リースにしても数が限られるのか。災害等が実際にあった時にどこまでバッファとして機能するものなのか。

（事務局）

1日当たり5トン以上の処理能力となると廃掃法の設置許可が必要となり、生活環境影響調査等

の手続きが必要となるので、5 トン未満が一つの目安となる。可搬式で災害時にリースなどで導入するようなものをイメージしているが、他都市では、こういった破砕機を常設している事例もある。いずれの場合においても面積を取らず、可搬式であれば普段は収納しておき必要となったらオープンスペースに移動するといった柔軟な使い方も考えられる。また、リースについては世の中で取り合いとなっているとは聞いていない。

（高岡部会長）

今回のプラン改定のうち、ごみ処理施設の整備・運営に対するご意見の項目についてご紹介いただいたが、他の項目の意見の中で、ごみ処理施設の整備・運営に関連するようなものがあればご紹介いただきたい。

（事務局）

他の項目においては、リチウムイオン電池対策とか、資源物回収拠点のご意見を多くいただいた。資源物回収については、京・資源めぐるプラン2025改定版（案）の36ページに具体的なことを追記した。リチウムイオン電池についても、搬入物検査の強化等の具体的な対策を記載している。

（島田委員）

先ほど矢野委員からパブリックコメントの特徴として若い世代の回答が一定数あると発言があったところだが、私が主な意見の中で特徴的に思ったのは、3ページの「プランの位置付けに対する意見」の項目で、「何かの取り組みをしようとする人が他の分野の行動について、何気なく関心を抱くことができるよう、それぞれの個別計画で位置付けるようにしてほしい」と意見がある。この意見された方が若いのかどうか分からないが、積極的に取組に参加していこうという人の意見だと思う。「大学との連携」といったことも何箇所か出ているところが、大学の多い京都市らしい。そういう意味でも、今回のこの部会では次期CCの整備に関する技術的なところがテーマであるが、パブリックコメントの意見の中で、京都市らしい点、京都市民の意識みたいなものをピックアップしていただきたい。「京・資源めぐるプラン」は技術だけでなく循環型社会の内容なので、ぜひ意見の中で取り組もうとする積極的なところと、大学との連携といった京都市らしい意見を今後策定する時の参考にさせていただきたい。

（事務局）

京都市では地球温暖化、資源循環、生物多様性の3分野を一体的に進めていくことを基本方針としており、分野の1つに関心がある人が、他の分野にも関心を持っていただき、その輪が広がっていくことは、非常に重要な視点と思っている。いただいたご意見を参考にさせていただく。

（高岡部会長）

今回のパブリックコメントの意見提出方法に、意見募集フォーム、メール、FAX、郵送、持参があるが、意見募集フォームでの提出が多いのか。

（事務局）

全体の回答者数が254名で、そのうち222名が意見募集フォームからの提出であった。

議題：次期CCの整備に関する技術的課題の方向性

(事務局)

以下の資料に基づき説明。

資料2 次期CCの整備に関する技術的課題の方向性（案）

(笹尾委員)

山火事の延焼対策を調べていただき感謝申し上げます。スライド 27 で、山火事でなく土砂災害などの災害も考えると、災害リスクに対して可能な限り運営ができるような施設の設計、整備の仕方に配慮できる形を考えておく必要があるのかなという印象を受けた。もう 1 点、破碎施設については、大規模なものは作らないけれどもバックアップ的な小規模なものを設置する方向で検討していると記載があるが、方向性のはじめに「次期クリーンセンターに破碎施設は設置しない。」と記載するよりも、「設置はするが、小型で、可搬式のようなものを活用する」というように記載する方がいいのではないか。

(事務局)

土砂災害については、第 4 回部会でハザードマップを確認しており、土砂災害警戒・特別警戒区域に敷地内の一部がかかっているが、施設を建設するエリアにはかかっている。また、施設へアクセスする国道 9 号線の一部がかかっているが、国道 9 号線は交通の大動脈であるため、国による早期な対応が期待される。方向性については変わらないと思うが、土砂災害の視点について今回の部会資料のうち、「これまで調査・確認した内容」に記載できていなかったもので、記載する方向で検討する。破碎機については、本設の場合は交付金の対象となるが、今回は南部だけで処理能力が足りるため本設はイメージしておらず、災害時に使用するバックアップと考えている。そこの違いを明確にする必要があると考え今回の資料のような表現にしているが、ご指摘を踏まえて表現の仕方を検討する。

(高岡部会長)

交付金の対象となるかというところが大きいのかもかもしれないが、笹尾委員の指摘は理解できる。

(笹尾委員)

簡易な破碎機を設置するという自体はよいと思うので、記載のとおりはじめに設置しないとネガティブな表現で宣言するよりは、見せ方だけの問題だが、「設置する方向で検討する。ただし、簡易なものを想定している」としてはどうか。5 トンを超えるか超えないかの確認等、必要なことは今後していただくとして、検討いただければと思う。

(水谷委員)

亀岡市との広域化処理について、亀岡市の焼却施設はなくなるかもしれないが、破碎機は処分場に残るのか。破碎機が残ることを前提に考えていくのか、そこは別に考えるのか。

(事務局)

そういった部分も含めて、今後協議していく。

(高岡部会長)

広域化するのであれば、亀岡市の施設も含めて検討してもよいかもしれない。今回の南部クリーンセンターの火災のようなことがあると足りないかもしれないが、亀岡市の破砕機と次期クリーンセンターに設置する破砕機を相互に使用できるようにすれば、災害時のメリットにもなる。

(事務局)

亀岡市の破砕機を置いている処分場では、粗大ごみの自己搬入を受け付けておられるので、そのあたりの兼ね合いもあるが、今後協議していく。

(島田委員)

スライド7の資源物回収拠点のところで、パブリックコメントで「クリーンセンターに持ち込めれば便利」という意見について、同スライドの6項目目に「利便性が良い場所ではない」という記載があり、その後も「候補地が風致地区、自然風景保全地区で自然が豊か」とあり、その点が気になる。パブリックコメントの意見では渋滞を気にされている方もいるが、次期クリーンセンターに資源物回収拠点を併設すると市民は車で持ち込むことになる。一方で京都市は「歩くまち京都」を推進してノーマイカーデーを推進している側面もある。おそらく、「持ち込めれば便利」という意見をされた方は、山の中のクリーンセンターというイメージではなかったかもしれない。既存の回収拠点なども拡充を図るといったこともパブリックコメントの回答で書かれているので、今後検討する際には、場所・立地と、風景、自然が豊かな環境等の条件も含めて検討していただくようお願いしたい。

(事務局)

スライド8の方向性に「他の回収拠点との役割分担という観点も考慮しながら検討していく必要がある」と記載しているが、それに今いただいた立地条件、周辺環境への配慮の視点も追記させていただく。

(矢野委員)

資源物回収拠点としては市民の利用のしやすさという視点も大事であると思う。これから市内で、どの拠点で何を集めるかを決めていくことになると思うが、それぞれの拠点によって回収する品目がバラバラだと、それはそれで市民の方も混乱されるので、方向性のところに「市民の利便性、利用のしやすさ」といった視点も盛り込んでいただくとよい。

(事務局)

重要な視点なので盛り込むように検討する。

(水谷委員)

スライド22の灰の資源化について、CO₂の排出量で、スラグ化、焼成砂化をするとCO₂が増

えることはわかるが、セメント原料化した時に CO₂ がかなり減るといのはどういったことからか。

（事務局）

セメント製造工程で焼却灰を石灰石の代替えすることによるもので、本来、石灰石を製造する際に排出される CO₂ 排出量を削減効果として示している。

（水谷委員）

社会的にトータルで CO₂ 排出量が減るという意味では良いと思う。しかし、スラグ化と焼成砂化の場合、まさしくその処理施設からの CO₂ 排出量が増えていくのに対して、セメント原料化の場合はセメント製造側での削減効果となるため、施設側で減るということにはならない。そのため、原単位表に横並びで記載されているのは違和感がある。

（事務局）

原単位については、前回の施設規模を変えて計算し直したものであるが、水谷委員がおっしゃるように、どこから排出されて、どこで削減されているかは考慮する必要があると考えている。他の自治体にスラグ化を委託する場合には、京都市の CO₂ 排出量にはカウントされないが、それで良いのかという議論もある。

（高岡部会長）

スライド 3 について、ライフサイクルコストということであれば、イニシャルだけでなく、メンテナンス費については、例えば湿式排ガス処理装置や触媒脱硝装置についても、20～30 年といった耐用年数を考慮しているということか。

（事務局）

費用について、耐用年数を考慮した設備費のイニシャルと薬剤費や最終処分費のランニングを考慮しているが、設備のメンテナンス費の差は考慮していない。考慮した場合、更なるコスト削減効果があると思われる。

（高岡部会長）

スライド 3 の CO₂ 削減量はどのように取り扱っているのか。

（事務局）

CO₂ 削減量は、その設備を廃止することにより発電量が増加、エネルギー回収量が増えるという点を試算している。設備の製造や廃棄に伴う CO₂ 排出量や、細かいことをいうと、設備面積の減によって建築が小さくなるといった効果もあろうかと思うが、そこまでは含んでいない。

（高岡部会長）

スライド 13 の排水処理について、旧西部クリーンセンターは河川放流という認識でよかったか。河川放流をしてきたという実績があるかという意図で確認したい。

(事務局)

以前は河川放流を行っていた。

(高岡部会長)

スライド21の焼却灰からの金属回収の方向性について、落じん灰はメリットが分かっているので導入を検討とあり、主灰からの金属回収については他の延命策と比較し、検討するとある。金属を回収することによるCO₂削減効果も大きく、焼却施設のサーキュラーエコノミーという観点では重要となるので、積極的に検討いただきたい。灰の資源化についても同様で、社会情勢を見極めながら積極的に検討していただきたい。焼却灰中に含まれる希少な金属がポテンシャルを持っているという事実もある。

(事務局)

金属を回収することによるCO₂排出量の削減という観点も持ちながら検討を進める。スライド23に記載しているが、焼却灰からの高度選別を複数社が行っている。金・銀・プラチナも少なからず含有していると聞いているので、そのあたりの調査も引き続き行う。

(高岡部会長)

事務局からご説明いただいた方向性について、各委員から基本的にご了承いただいたことと思う。ただし、何点かご指摘いただいた意見があるので、各項目の方向性について、本資料をベースに修正したものを審議会へ報告することとしたい。

(事務局)

本日もご指摘いただいたご意見を踏まえて本資料を修正し、各委員には後日メールにて修正内容をご確認いただきたい。

議題：今後の検討の進め方

(事務局)

以下の資料に基づき説明。

資料3 今後の検討の進め方(案)

(高岡部会長)

次期クリーンセンターの整備についての議論は、今回の第5回の部会をもって一旦終了とする。引き続き、他の資源循環に関わる施設整備については、改めて部会において審議し、その後、答申を行っていくということでした。

閉会

(事務局)

本日は遅い時間にもかかわらず、委員5人全員にご参加いただき、厚くお礼申し上げます。本検討部会では、約1年間で計5回の会議を開催し、ご議論いただいた。前半は「施設整備の基本的な考え方の検討」という幅広い視点から、後半は「次期クリーンセンター」にターゲットを絞った、具

体的な内容についてご議論を深めていただいた。広い視点から、個別の課題に至るまで、委員の皆様から貴重なご意見をいただき、私共にとって非常に有意義な検討の場となった。1年間の議論を経てとりまとめていただいた、次期クリーンセンターの方向性を踏まえて、京都市として次期クリーンセンター整備方針を策定し、来年度から環境影響評価などの手続きを進めてまいる。次期クリーンセンターについての部会での議論は今回で終了するが、資源循環、主に資源回収拠点に関する議論を審議会本会のもと、継続してまいる。部会名等、今後の進め方については審議会本会の酒井会長と相談の上、改めてご案内させていただく。本日で本部会での次期クリーンセンター整備についての本検討部会での議論は一区切りとなるが、次期クリーンセンターの整備事業はこれから10年越しで続いていく。引き続き委員の皆様には本整備事業の推進にお力添えをいただくようお願い申し上げますとともに、1年間にわたりご議論いただいたことに、改めて感謝申し上げ、閉会の挨拶とさせていただきます。

(閉会)